

美しい死

円生を悼む

宇野 信夫



円生が死んだ。九月一日の

夜、サンシャイン劇場の松竹落語会で、彼の最も得意とする「夏の疾者」をきき、ハネてから会って話をかわした。その一日おいて、もう円生はあの世の人だ。

「年齢というものは単なる習慣である。意欲のある者に年齢はない。これを實地に現せてくれているのが円生である」——円生についての感想を求められると、私はいつもそう言ったり書いたりしてきた。

しかし、天はやっぱり円生を八十歳でもっていった。酒恋野の後援会に出席してあいさつがあとで「後嗣」という小冊子(こほなし)をつとめたが、気分がおかしくなり、病院で息をひきとった。あつという

間であった。あつけない死に方である。考えようで、うらやましい死に方である。死の直前まで本職をつとめ、人々に笑顔を寄せ、人々の笑顔を見て、それから死ぬ。芸人として、ほんとうに美しい死に方である。

私は昭和初期の円藏時代から円生を知っているが、そのころの彼は、あっさりとして興味(いやみ)がないだけの、ぱっとしない人であった。戦争中、内地では稼げないので志ん生と一緒に満洲へ渡った。終戦になっても帰国できなかった。その時円生は、ああ、命があったら、帰国できたら、生まれ変わって落語がやりたいと、しんから思ってたそうだ。そして、やっと帰ることができて、彼の芸は生まれ変わった。

芸にたずさわる者は戦して他を認めないものだが、円生は志ん生を認めて「初め私は志ん生を川向こうの人に物を言うような話しよりの人だと思っていたが、あの人と野天で真剣勝負をすると、私は大分斬(き)られることがわかってきた。しかし、道場で試合をすれば打ちこむことができる」——そんな意味のことを言っていたが、そうした自信と他を認める心がまえば、晩年のあした円生にしたのである。

円生は、累ヶ瀬その他の人情筆と、「円生百篇」として自十席の落語を、苦心の末に、全部レコードに吹き込んだ。それが完成したのは、先月であった。内心ほっとしたろが、まだまだ彼は意欲をもっていた。それにしても、この三月の歌舞伎座の親会合の「乳房梗」は、まだ私の耳にある。

ある人の川柳に「国技館たった二人にあの騒ぎ」というのがある。この間、知人が「国技館たった一人にあの騒ぎ」——今度は国技館で独演会をやらんのだね、と冗談をいうと「えへへ」と例の独特の笑い方をしたが、永久に彼の独演会も、その笑い声もきくことができなくなってしまった。(九月三日夜・劇作家)